

階下の火事

岡山市立岡輝中学校

三年生 戸田文仁

三月十六日、マンションで火事が起きた。

午前四時頃、女の人の泣いているような声が聞こえて目が覚めた。大きな音もして、わさわさと、胸の奥が膨らんでくるような不安な気持ちになった。同じく目を覚ましていた母に、

「何か怖い。」

と言うと、母は起き上がって窓を開けた。

「火事、火事。お父さんを起こして。」

と母が叫んだ。ベランダから見えるはずの景色が黒一色に塗りつぶされ、激しい熱気が部屋に入ってきた。暗黒の中にオレンジ色の火柱がゴウゴウと音を立てて燃え上がっていた。

「お父さん、火事、火事だよ。」

と思いつきり叫んだ。父は目を覚ましたが、状況が全くわかっていないようだった。僕は母に指示されるままに、学校の靴に制服を詰め込んで背負った。母は父をせかして、玄関のドアを開けた。ここも激しい熱気におおわれていて、息ができない。エレベーターの方を見ると、危険を知られるランプが点灯していた。

「走るよ。」

と言った母の後を追って、階段を駆け下りた。

火元は九階で、僕の部屋の二階下だった。踊り場で、女の人が消火器を抱えて泣き崩れていた。階下はたくさんの人で混雑していた。

「大丈夫でしたか。お父さんは？」

を声をかけられて、振り返ると、父はまだ、ゆっくりと階段を下りているのが見えた。やっと下りてきた父に、

「何やってんだよ。」

と言ったが、父は、九階の廊下から噴き出る炎を仰ぎ見て、初めて何が起きているのか理解したようだった。

僕たちが呆然としている間にも、消防団の法被を着た人たちが、早朝にもかかわらず、マスクを配ったり、避難所に誘導してく

れたりしていた。母も自動車にマスクを取りに行き、周りの人に配り始めた。顔を合わせたこともない人たちが、

「大丈夫ですか。」

「マスクをどうぞ。」

「ありがとう。」

「ご家族は無事ですか。」

などと言葉をかけ合い、助け合いの輪を作った。

鎮火が告げられ、順番に部屋に戻れることになった。燃えた跡を見ながら、ゆっくり階段を上って部屋に入った。部屋の中を霞のように白い煙が漂っていた。一緒に上がってきた消防隊の人が、

「状況を確認させてもらいますよ。」

と言いながら、ベランダに出て、

「ガラスも割れていないし、網戸も燃えていませんね。」

と意外そうに言った。しかし、僕たちは絶句した。僕が生まれた頃に我が家にやってきた二本のオリーブの木が、昨日と同じ姿で立ってはいいたが、枝も幹も焦げ茶色に変色していた。天井に着くほど茂らし、外壁を乗り越えて、しなるほどたくさんのつぼみをつけていた枝葉を、ガラスと網戸の前で広げて、迫っ

た火から部屋を守ってくれたのだ。

春を迎え、花盛りだった生命にあふれたベランダは、白黒写真のように静かだった。煤まみれの備前焼の布袋が、黒焦げのオリーブの前で、いつものように陽気に踊っているのを見ると、涙が出てきた。

この日も僕は、いつも通り学校に行った。朝のことは夢のように思えたが、帰宅途中、黒く焦げたマンションの外壁を目にして、がっかりした。オリーブも立ち枯れたままで、母は、

「片付けていいのかもわからんし、疲れた。」

と、ソファアの上で背中を丸くして横になっていた。

三月十七日、片付けを始めた。

どこを触っても真っ黒だ。母は僕の雨ガッパを着て、黒く汚れたものを黙々とごみ袋につめていった。干していた僕の体操服、マスク、バスタオルを、くすんだ物干し竿から外すと、そこだけがピカピカと光っていた。一昨日まで咲きほこっていたのに、茶色くしおれたムスカリやパンジーも、未練を断ち切るように乱暴に植木鉢から抜いて、ごみ袋に入れた。芽吹いていたレンギョウや百日紅、小さなつぼみがついていた紫陽花や梔月も、ほとんど枝を残さなかった。昨年、理科の自由研究で蒔

いた種子が土に残っていたのか、冬に一株だけ勢いよく深緑色の葉を伸ばしていた小松菜も、根元から引きちぎった。オリブは、枝をすべて刈り取ると、棒切れのようになってしまった。この日、爪の間に入った煤は、洗っても、洗ってもきれいにならず、その後一週間も取れることがなかった。

九階の住人は、みんな引越していった。火災は調理中の失火が原因だ、と新聞で報じられていたが、火元の女性はその後どうなったのか、エレベーターの外柱がゆがむほど燃えたのはなぜか、なぞはたくさんあるのに、火事についてまったく説明がなかった。噂が噂を呼んで、みんな疑心暗鬼になっている。火災のほかにも、何か別の犯罪が起きていたように思っている人もいる。混乱と不安によって、あの日にできた助け合いの輪は、あっけなくしぼんで消えていった。

三月二十四日、敦盛草が咲いた。

熱風を浴びたはずなのに、それでも芽を出し、丸い母衣のような花卉を持ち上げている。よく見ると、周りの植木鉢にも草が生えてきている。まだ、火災から八日しか経っていないのに、人間はまだ疲れを残したままなのに、植物は強い。

「お帰り。お帰り。」

と心の中でつぶやいた。

四月になると、ぶどうもツルを伸ばし始めた。でも、オリブだけは棒切れのままだった。父は、

「もうダメだろう。諦めた。」

と言ったが、母はもう少し待つと言いつ張った。それでも、焼け焦げた幹を切ってみることにした。切り口はカスカスになっていて、何とか湿り気を感じられるところまで切り進めると、とうとう二十センチ程になってしまった。父が言うように、オリブは死んでしまったように思えた。

四月十六日、火事からちょうど一か月が経った。

母は朝方が覚めて、眠れなかったと言っていた、僕たちの心の傷は、まだ癒えていない。恐怖は心の中に残っている。濃霧の朝、窓の外が真っ白なのを見たり、何か得体の知れない臭いが漂ってくるだけで、身構えてしまう。火事のニュースが流れると、テレビの画面を見るようになった。人が亡くなったと聞いても、何で逃げなかったのか、とは思わない。気が付いた時には熱く、息もできず、絶望的な気持ちになることを知っている。

五月六日、ぐずついた天気が続いた後、久しぶりに晴れたこ

の日、とうとうオリーブの幹の割れ目から、小さなゴマ粒のような緑がのぞいた。

オリーブは生きていた。棒切れと化してからも、水や肥料をやり、変化がないか観察し、頑張れよ、と声をかけ続けたかいたがあった。鉢の前にかがみ込んでいた父が、

「俺のように、人生の先が見えているものには、このオリーブの姿が特別なんだよ。」

と嬉しそうに立ち上がった。オリーブはきつと、僕たちの心を再生してくれる。

八月二日、改修工事が始まった。

オリーブは、今では焼け残った幹からも、根っこからも、あらゆる方向に新しい枝を伸ばしている。十月に改修工事が終わって、防御網がベランダから外されたら、火災のことは思い出話になる。